

教育力向上福岡県民会議 第1回 専門部会 議事録(要旨)

1 日時 平成20年3月27日 13:30~16:40

2 場所 吉塚合同庁舎

3 会議次第

(1) 開会

(2) 副知事挨拶

(3) 教育力向上福岡県民会議委員専門部会委員委嘱

(4) 教育力向上福岡県民会議委員専門部会委員紹介

(5) 議事

設置要綱・今後のスケジュール(予定)について

専門部会会長選出・専門部会副会長指名

審議内容に関する資料説明

審議

4 会議内容等

<海老井副知事挨拶(要旨)>

教育力向上福岡県民会議は、「心豊かで、学習活動や芸術・文化・スポーツ等の体験活動に取り組む意欲と創造性あふれた子どもを育てるため、『福岡の教育ビジョン』を策定し、広く県民運動として実施する」ことを目的に、学識者、産業界、教育関係者17名を委員に委嘱し、昨年7月に設置されました。

この教育力向上福岡県民会議は、昨年7月26日に第1回会議を開催して以来、本年1月までに5回の会議及び県内6地区での地区分科会を開催、さらに、パブリックコメントの募集もしまして、本年1月31日に、知事に「第一次提言」として「福岡の教育ビジョン」が提出されたところです。

「第一次提言」は、県民総がかりで「福岡が目指す子ども」の育成を図るための、基本方針というべきものです。

提言では、今日の子どもが抱える本質的な課題を、「学ぶ意欲の低下」「自尊心の低下」「規範意識の低下」「体力等の低下」の4つに整理した上で、その要因や解決に向けての取組の視点を示し、併せて「実体験を重視した教育の推進」「家庭や地域における学校への支援」など、早急に取り組むべき6つのアクションプランを提案しています。

また、この提言の中では、私たち大人が留意すべき事として、教育における「個性」、「自由」、「平等」といった基本的な考え方について共通認識をもって子どもの教育にあたること、行政、学校、家庭、地域が責任をもって、それぞれの役割を果たしながら、連携・協力していく必要性を提起しています。

この第一次提言を具現化していくためには、行政が提言内容を踏まえた具体的な施策や事業を打ち出していくことはもちろんですが、学校・家庭・地域の皆様が、それぞれの地域の特性やこれまでの取組状況等を踏まえながら、自主的、積極的に取組を進めていただくことが、何よりも重要であると考えております。

したがいまして、今後は、この教育力向上福岡県民会議におきまして、第一次提言に示されました6つのアクションプランを中心に、どのように学校・家庭・地域の役割分担を明確にし、さらに、連携を図っていくか、また、県民総がかりで取り組んでいく県民運動をどのように展開していくかということにつきまして、引き続き検討していく必要があります。

そのためには、それぞれ専門分野の実情に精通され、また、現場の状況を御承知されている方々のお力が是非とも必要であることから、このたび、皆様を専門委員に委嘱させていただいたわけです。

専門委員の皆様には、提言内容の実現のために必要な、具体的方策等につきまして、様々な御意見・御提案等を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

< 委員委嘱 >

机上への配付をもって、委嘱状交付にかえる。

< 県民会議委員・県庁委員紹介 >

50音順にて県民会議専門部会委員を紹介。

県民会議プロジェクトチームを紹介。

< 設置要綱説明 >

【教育力向上福岡県民会議専門部会設置要項の説明】

- ・ 事務局から、設置の趣旨、組織等の説明

【審議日程及び審議事項の説明】

- ・ 本会議を本日を含め5回の予定。
- ・ 第4回目までに第二次提言の素案を作成し、本会議での審議を経て第5回会議で第二次提言案をまとめる。
- ・ 地区分科会、パブリック・コメントを実施し、結果を本会議に報告し、本会議で第二次提言をまとめる。

< 専門部会会長選出 >

会長に横山正幸委員が選出。

< 専門部会副会長指名 >

横山会長が太田浩二委員、正平辰男委員を副会長に指名。

【会長挨拶】

福岡県では、県民会議の他に「青少年アンビシャス運動」を展開している。こちらが家庭、地域を中心とした取組である。この県民会議は学校を中心とした取組である。いずれにしても、夢をもって、志をもって、たくましく生きていく子どもたちを福岡県で育てていこうとするものである。素晴らしい取組であると思う。

基本的な構想や考え方は、第一次提言で知事に提案されている。この専門部会の役割は、第一次提言をさらに深め、具体的にどう進めるかを協議する場であると考

えている。

委員各位の協力を得ながら、実効性のある具体的な提言にまとめるように会を運営していきたいと考えている。委員の皆様から、率直な意見、アイデアを出していただければありがたい。

【副会長挨拶】

子どもたちは毎日、毎日、いろいろな問題を抱えながら過ごしている。

P T A 連合会では、3年前から「“新”家庭教育宣言」として、親子のルールをお互いで作りながら、保護者と子どもがコミュニケーションを図り、1つ1つ当たり前のことをやっていこうという運動を続けてきた。本年では約7万8千人くらい
の家庭でこの取組を進めている。

それぞれの取組は、早寝、早起き、朝ごはんから、いろいろな手伝い、ノーテレビなどに踏み込んだ内容になっている。この取組をもっと広げないと、子どもたちは変わっていかない。

福岡県P T A 連合会、福岡市P T A 協議会、北九州市P T A 協議会で、「ストップ ザ 非行」福岡大会を開催している。残念ながら、5年連続の非行率第1位ということも聞いている。こういった問題を解決するためには、県民挙げて子どもたちを教育していくような運動を徹底していくことが一番ではないかと考えている。

< 審議に関する資料の説明 >

【事務局より】

資料2「第一次提言「福岡の教育ビジョン」に提示された取組等」

「福岡がめざす子ども」を育てるアクションプランと、子どもが抱える4つの本質的課題に記述されている、学校、家庭、地域及び行政に求める取組、施策、制度の見直し等を一覧にしたもの。

参考資料1「提案 実体験を重視した教育を推進しよう」に関する資料

(1) 学校における体験活動

- ・ 体験活動の実施状況は、全ての小、中学校において、何らかの体験活動を行っている。
- ・ 体験活動の内容は、小学校では自然体験が最も多く、次いで環境。中学校では職場体験が最も多く、次いで自然体験。
- ・ 少ない例では、小学校では職場体験や国際交流、中学校では国際交流や伝統文化に関するもの。

(2) 日常生活での経験

- ・ 最も経験していないことは、小・中学校とも「体の不自由な人、お年寄り、困っている人を手助け」したこと、次いで「清掃活動への参加」。

参考資料2「提案 学校を支援する体制を整備しよう」に関する資料

(1) 地域の人材を学校教育に活用した学校数

- ・ ほとんどの小中学校において、地域住民の方から学校教育活動に御協力いただいている。

(2) 外部人材を活用した教科や領域

- ・ 総合的な学習の時間が最も多く、次いで特別活動の学校行事。

(3) 地域施設の活用

- ・ 小学校の97.5%、中学校の82.2%は地域の施設を活用している。

(4) 学校評価の実施状況

- ・ 第一次提言のアクションプランの「提案 学校を支援する体制を整備しよう」で、地域や家庭の支援を受けるためにも、学校は積極的に情報を提供するとある。
- ・ 平成18年度の実績では、全ての学校が自己評価を実施しているが、公表率は3割強である。
- ・ 平成17年度の公表率が高いのは、児童生徒や保護者のアンケート結果を積極的に公表したためだが、平成18年度には、アンケート結果の公表は、学校評価の公表に含めない規定をしたため、公表率が減少している。

参考資料3「提案 学校を支援する体制を整備しよう」に関する資料
外部人材をどのように活用しているのかの事例。

- ・ 専門的な知識や技能などをもつ人にゲストティーチャーとして活用する例が最も多い。また、生活科の例にあるように、校外学習時の安全見守りなどをお願いしている例もある。

【質問】

ビオ・トープとは何か。

【事務局】

ドイツで盛んに行われている。小さな自然を学校の敷地内につくり、自然に近い形で動植物を飼育栽培するもの。

<意見交換 (要旨)>

【会長】

「第1次提言」では、「福岡がめざす子どもを育てるアクションプラン」として、6項目の提案がある。本日は、この6項目の提案のうち、「実体験を重視した教育を推進しよう」、「学校を支援する体制を整備しよう」の2つを中心に議論を進めていきたい。

この専門部会では、「第1次提言」で提示されている基本的な骨格、考え方を受け、学校、家庭、地域ではそれぞれ何をしなくてはいけないかを、県民運動としてどのような取組を示していくべきなのか、ということ議論することになる。委員の皆様をお願いしたいことは、抽象的、概念的な考え方よりも、「第1次提言」を踏まえた具体的な方法や取組を提案していただきたい。最終的には、具体的な戦略や方法としてまとめていくことになる。

まず、「実体験を重視した体験を重視しよう」から、お願いしたい。4つの本質的な課題を解決するための実体験などについて、情報提供をしていただきたい。

学校で重視すべき体験としては、新たな体験を作り出すのではなく、今、学校では、特別活動が実施されていることを踏まえるべきである。特別活動の目標（新学習指導要領）には、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態

度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。」とある。この目標をみると、「第1次提言」で示された福岡がめざす子どもの姿である「志をもって意欲的に学び、自律心と思いやりの心をもつたくましい子ども」の内容と同じである。つまり、福岡がめざす子どもの姿は教育課程上に位置づけられていると、学校は明確に把握する必要がある。具体的には、学級や学校の生活づくりという内容が盛り込まれており、バーチャルな体験ではなく、自分たちの学級、学校を自分たちの手でよりよくするために、話し合い、役割を分担し、実践するという体験の積み重ね、それが地域や家庭での自治的・能動的な体験の基礎づくりになるのではないか。いずれにしろ、学校に特別活動の充実をしっかりと知らせる必要があるのではないか。

アンビシャス委員をやっているが、今の子どもの実態をみると、大変忙しい。1週間や1ヶ月の予定を聞くと、塾や習い事などで手帳を見ないとわからないほど忙しい。提言にあるように、自然にふれあったり、地域の福祉活動に参加したりしようと言ってもなかなかできない。子どもと接する機会が少なくなっている。アンビシャス運動としては、先に年間スケジュールを打ち出し、それを学校やスポーツ少年団などに示し、連絡をとりながら、行事のある日はアンビシャスに参加させるよう要請をしている。参加率は7割くらいであるが、参加した子どもや保護者に意見を聞くと好評である。地域と学校が連携し、話し合いをしながら、子どもの居場所をつくっていくことが大切である。広場だけで実施しようとしてもなかなかできない。密接な関係が必要。

学童保育もやっているが、家庭におけるしつけ、ルールやマナーの指導など、保護者の子どもへの関わり方が変になっている。今日もJRで吉塚駅で、乳母車で小さな子どもを連れた母親が電車から降りようとしたときに、高校生の女の子が、母親が降りるのを待たずに、ハンバーガーを食べたり、携帯を操作したりしながら電車に乗り込んできた。注意はしたが、睨み返された。家庭でマナーやルールをしっかりと教えないければならない。何でも学校に頼るのではない。

遊びを活性化する方法として、子どもたちが「広場に来たい」という意識をもたせるために、子どもが組織して、子どもが運営する広場づくりに取り組んでいる。自分たちが広場に関わっているという意識をもたせることで、失敗しても成功しても自分たちで自主的に企画・立案・運営していくことができる。効率よく活動をさせるのであれば、大人が企画・運営したほうがよいが、それでは自主的な活動にならない。時間がかかっても、失敗しても子どもに任せた方が効果は大きい。最初は大変だが、年度を重ねるとしっかりと実行できるようになる。

これまで、学校や地域、家庭で体験活動が行われてきたが、なかなか自主的な活動にならず、「させられ体験」になっていたため、成果が現れにくかった。今の意見のように、子どもに企画・運営に関わりをもたせることで、広場での遊びも活性化していく。

小学校と中学校の一貫教育を行い、異年齢交流に取り組んでいる。取り組もうとし

た理由は、中学校2年生や3年生で若干見られる「荒れ」が心配であったからである。異年齢交流の成果としては、次のとおりである。

小学生は、中学生にあこがれをもち、「あんなお兄さん、お姉さんになりたい」という思いをもたせることができる。中学生は確実に自尊感情が高まる。小学生が頼るので、自分に自信をもち、自分を肯定的にとらえるようになる。リーダーシップも発揮できるようになる。ただ、今は単発的な活動に終わっているので、来年度は、特別活動の中で、中学生をリーダーとした縦割り活動を計画的に仕組む方法を考えている。具体的には、地域の清掃活動に取り組んだのが最初である。その中で中学生をリーダーにした。また、運動会を小中合同で実施し、小学生と中学生が1つの種目（競争遊技）に出場するようにした。練習の段階から合同で行い、中学生が優しく小学生に接する機会を増やした。

今、地域では縦割の遊びがとぎれている状態。子ども同士の異年齢での学び合いが無くなっている。

幼児教育でも体験が必要であると言われて久しい。多くの幼稚園でも取り組んでいる。しかし、以前と比較して入園してくる子どもが幼くなっている。おむつがとれない子ども、基本的な愛着の精神が育っていない子どもなどは、入園後に幼稚園で育て直していくという意識をもち、2歳児カリキュラムを年少で取り入れている。個別指導が必要であり、基本的な生活習慣もほとんど身に付いていない。幼稚園で基本的な生活習慣を身に付けていくことを親も期待している。

兄弟がいても兄弟間の遊びが希薄であることから、年少・年中・年長をペアにしたペア交流に取り組んでいる。疑似兄弟体験ができ、絆が深まり、より関係や遊びが深くなる。そうすると、年長が卒園の時にペアの年少・年中が泣く。そういった心の育ち、体験が今乏しいのではないか。コミュニケーション能力も高まるし、自分の存在や価値、自分が守られているという意識が高まる。そして、年長になれば、年少・年中をしっかり世話していきながら、自己有益感を高め、自尊感情が高まっていくのではないか。

【会長】

まず、自己肯定感が育ってきて、その上に自尊感情が高まる。その際に、異年齢交流、ペア交流が効果的であり、意味がある。

保育園も同じ。自分たちで考えて、自分たちで何かを決めていくという能動的体験に取り組んでいる。能動的な体験になると、自分ができたときの満足感が全然違う。保育士が計画した活動で味わうできた喜びと自分たちで計画したことが成功した喜びとは全く違う。

異年齢交流にも取り組んでいる。年長に対するあこがれをもつし、年長も同年齢では自分のよさを発揮できなくても、異年齢でリーダーシップを発揮でき、自分の居場所を感じることができる。それが自分への自信につながる。体験することは大事ではあるが、ただ体験するだけではなく、大切なのは、心を震わせるような体験をすることである。なにかをしたときに、「嬉しい」、「悔しい」、「悲しい」、「楽しい」などの

感動を伴わない体験は、なかなか身に付いていかない。全てがお膳立てされた体験では、思ったような効果は得られない。

【会長】

子どもが自ら関わっていくような体験が必要。しかし、大人がつい手を出してしまう。用意してしまう。子どもからみると「させられる」になってしまう。体験に取り組んで久しいが思ったような成果が見られないのはそのせいではないか。大人がどう関われば、子どもが積極的になり、体験活動が意味のあるものになるのか。そういった研修も必要なのではないか。

「させられ」体験になる理由は、学校では時間が決まっているからである。限りなく時間を費やしてよいのであれば、自主的・能動的な体験ができる。全ての子どもに同じ体験をさせるということが学校の特徴であるが、教育課程上の配当時間もあるし、できる子とそうでない子の差が大きい。個別指導やアシスタントを何人かつけて、徹底的にやらせないと時間内に終わらない。全体の仕組みの中で、始めから終わりまで、まるごとの体験を子どもにさせることが大切。その中で、家庭での基礎的な体験をしていなければ、学校で請け負うのは無理である。

いきなり子どもに「自分でやりなさい」と言ってもできない。ステップを踏む必要があるのではないか。保育園・幼稚園から小学校、中学校とその発達段階に相応しい自主的な体験を積み重ねていけば、克服できるのではないか。長期的な視点が必要だが。

実態に応じて必要なバックアップ体制をとることが重要である。

地域での体験活動では、カレーづくりやキャンプファイヤーでも保護者の競争になってしまっていた。指導ボランティアとしての立場を保護者に指導することが必要である。

体験に時間の制約があるのは事実である。1つの方法として、計画段階から子どもに参加させることが大切である。実際の活動をイメージさせて、実施可能なのかどうかを判断させ、実行させる経験を重ねていく。昨年、「おやじの会」の協力を得ている。始めは、キャンプファイヤーの準備を「おやじの会」の方がしてくださった。しかし、子どもたちに準備させるものなので、キャンプファイヤーをまた崩してもらった。「おやじの会」には、安全面のフォローだけをお願いした。

【会長】

悪気はないけれども、体験の中で保護者が子どもの面倒をみるのは、文化かもしれない。その中で、どうすれば体験活動が意味あるものになるのか、そのためには、どう関わるのか。といった情報提供をする必要がある。

保育園では、どの程度まで自分たちで力を発揮して実施できるのか。

毎日の生活の中で、「子どもにできることは、子どもの手で」をモットーにしている。例えば、掃除の時、これまでは保育士がバケツに水を汲んでいた。これは、子どもたちにできるのではないかと考え、「誰か水汲みをやってくれる人？」と尋ねると、「はい。」と何人かが手を挙げる。させてみると、きちんとできる。「私たち(保育士)は、子どもができることを取り上げていたんだ。」という話になり、これまで、当たり前のように保育士がお膳立てしていたことがたくさんあることに気付いた。それから、少しずつ、保育士がやっていたことを子どもたちに渡していこうという意識をもって生活を見直している。

生活発表会でオペレッタをするときも、ストーリーを考える人、進行をする人、道具をつくる人など子どもたちが自分で考えて分担することによって、自主的なものができあがった。大人が考えているよりも子どもたちができることはたくさんある。「子どもたちはできないもの」と頭から決めつけていた。生活を見直して、『自分たちの生活を自分たちで』という取組を行っている。

我々が考えているよりも子どもたちはできる。例えば、小学校2年生だけで活動させるには、小学校4年生や5年生と合同で活動するときの2倍から3倍の時間がかかることを大人は覚悟しなければならない。決して急がせない。そして、早くできた子は、みんなが揃うまで待たせる。そうすれば、子どもたちでも十分に宿泊活動もできる。したがって、大人が長い時間「待つ」という覚悟をもつことが大切。

確かに、子どもの自主的な活動には時間がかかる。しかし、幼児期からそのような体験をしていけば、していない子に比べてかなり早くできる。幼児期からの体験の積み重ねが大切である。体験していないのに、いきなり自分たちだけでさせるのは難しい。

大人の指示も「こうしなさい」ではなく、「どうすればよいと思う？」と問いかけ、自主的な活動を促すような声かけが大切だと思う。もちろん、子どものアイデアに対して「そうすれば、このようになるよね。」と改善点を指摘することも大切である。私たちは鼓笛やマーチングバンドなどのような保護者が喜ぶ活動はできないが、でも生活をいかに丁寧に自分たちで創りだすかということと、外で元気に遊ぶことを大切にしている。

学校は基礎的・基本的なことをきちんと教える立場であるという考えに賛成である。時間は無限にあるわけではない。週5日制になり、実際には時間がとれないというのが実情である。

体験も学校だけで実施できるものと、家庭や地域の協力や連携がないと実施できないものがある。学校だけで実施が難しいものは、外部から講師やボランティアの方(ゲストティーチャー)の協力を得ないといけない。しかし、まず、ゲストティーチャーとの打合せの時間が必要になる。「この体験でこういったことを学ばせたいので、このときに、ここまで指導してください。」ということ十分に打合せをしておかないと、ゲストティーチャーが懇切丁寧に指導しすぎて、自主的な体験にならなかったことがある。また、学校が必要としている分野に精通したゲストティーチャーが地域にいない場合、遠くの方を招聘するには予算的な支援が必要になり、学校単独ではできなくなってしまう。教育委員会の支援がなければ、学校が実施したい体験活動

ができない場合もある。

新しい学習指導要領では、小学校の5・6年生に年間35時間、外国語活動が導入される。子どもたちにネイティブスピーカーの方の英語を聞かせたいが、地域に人材がないということも現実にある。

異年齢の交流は、アンビシャスの中で一番子どもたちのためになったと思う。2歳から高校生までが参加している。行事や様々な活動をする中で、年上の子どもが活動している様子を見て、年下の子どもが「やってみたい。」という気持ちをもつ。みんなで手打ちうどんをつくる時も、2歳の元気な男の子が「いりこ」の頭取りをした。高校生が粉を打っているのを見て、「自分には同じ事はできないが、何かしたい。」という気持ちをもったときに、「何をさせるか」を提案するのが大人の役割ではないか。みんなで協力して、うどんをつくる一員としての自覚をもって参加することができた。

このようなアンビシャス広場の活動から発展して、総合型地域スポーツクラブに取り組んでいる。これまでも地域でスポーツ活動は行われてきたが、今の子どもは兄弟でもキャッチボールをしないということを知り、体力テストを実施してみた。すると、ボールを満足に投げられない子どもがいた。また、子どもは、木があるのに登ろうとしない、蔓があるのにぶら下がろうとしないことに気付いた。ボールの投げ方を教えるのは根本的な解決につながらないという専門家の指導を受け、遊び場、ボールを投げる場を整備することに取り組み始めた。保護者にも話をして、「何年生になったから、このスポーツを始めなさい。」といっても、小さな頃からの遊びや運動の経験がないとできないことを理解してもらった。

遊ぶ広場をつくって遊具を置くのではなく、自分たちで遊びを工夫できるような場を整備することが大切である。遊びの中でけがをしながら成長することを、保護者に自信をもって指導できる大人を増やしていくように取り組んでいる。

遊び場をつくるには、具体的にどのような土地なのか。

町所有の土地があり、その中で全く使っていない土地があった。草取りは自分たちで行い、町と交渉して取った後の草の処理を無料をお願いし、木登りや自然遊びができる場所を整備した。

地域で11年通学合宿に取り組んでいる。合宿に参加する子どもたちをみると、体験をしていないことがわかる。保護者も体験させていない。7泊8日の通学合宿を行うと、子どもたちはいろいろなことができるようになる。食事ができなければ、食わずに登校するか、遅刻する。そうすれば、子どもは自分で食事の準備や後片付けができるようになる。少々危険なことも体験させることで、子どもは成長する。そのような体験を行うには、保護者の理解と行政の支援が必要不可欠である。指導者や協力者は団塊の世代が数多くいる。その人たちは自分から協力を申し出ることは少ないが、他の指導者が声をかけると、喜んで参加してくれる。活躍する場を欲しがっている。指導者や協力者が次の候補に声をかけることで、協力者が増えていく

様々な体験活動全てを学校だけが実施するとなると、教師は大変だし、子どもも忙しくなる。一方では、実態として子どもは体験が不足している。学校では、学習発表会をしたり、放送局に番組作りの体験を申し込んだりしている。こういうことに意欲的に取り組む子どもは、素晴らしい能力を身に付けたり、大きく成長したりする。問題は、関わろうとしない子どもたち。こぼれ落ちている子どもたち。そういう子どもたちは学校が楽しくないと思っているのではないか。

自分の子ども二人を見ても、学校を楽しんでいると感じていた子どもは、休み時間に先生と一緒に遊んでくれて、クラス全員で遊んでいた。学校が楽しくないと感じていた子どもは、先生が忙しかったのだと思うが、休み時間の先生は、机に向かって日誌を書き、学級の中にいくつものグループができてしまい、なんとなく人間関係がうまくいかなかった。こぼれていく子どもたちを何とかするには、学校を楽しむことが大切である。いかに、先生も子どもも学校を楽しむか、という主眼に置かなくてはならないのではないか。今、院内学級を訪問して、読み聞かせの活動をしている。興味のなさそうな子どもも、違うことをしながらも耳を傾けている。そういった活動も学校を楽しむことにつながるのではないか。また、コミュニケーション能力を高めることにもつながっていく。

学習が学校の主体であるが、子どもが学校を楽しんでいると感じる大きな要素は仲間である。地域でも遊びがない状態。ある調査で、昼休みに教師が中心となって集団遊びを実施した学級では、ほとんどの子どもが学校生活を楽しんでいる。自主性や学力も高まっている。遊び体験を豊かにすることが必要。学校での休み時間の遊びに、地域の人にも関わってもらってはどうか。楽しい学校は仲間が大切であり、それは遊びから始まっていく。

【会長】

コミュニケーション能力を高めることについて。

コミュニケーション能力を高めることは、なかなか簡単ではない。コミュニケーション能力で大切なのは、しゃべる力ではなく、聞く力だと感じている。相手が何を言いたいのかを相手の気持ちにそって、忍耐強く聞くこと、待つことが大切である。相手が何を言いたいのかを想像しながら聞くことになるが、想像するためには相手を観察しなければならない。観察することと待つことが必要である。また、相手の話を聞くときに、聞いたことを時系列に並べると、整理しやすいし、相手の話を引き出しやすい。

今の子どもは、話を聞くことができない。話を聞けないのは、子ども自身が自分の話を聞いてもらった経験が不足しているからではないか。赤ちゃんのときに、母親と目を合わせて授乳してもらったり、目と目を合わせて話をしたりする経験が少ないのではないか。保育園のお迎えのときに、今日あったことを子どもが保護者に話そうとしても、保護者は心ここにあらずで目を合わせて話を聞こうとしない。自分の話をきちんときいてもらっていない子どもが人の話を聞こうとしないのは当然ではないかと思われる。今、子どもの話を目を合わせて聞くことができるのは、保育士であり、教

師ではないか。

コミュニケーション能力の基本は幼児期につくられる。特に、4歳～6歳ぐらいがコミュニケーション能力が大きく成長する時期である。その時期に、しっかりと家族と話をすることが大切である。夕ご飯の時はテレビを消すことを保護者にもお願いしている。その時の家族の会話が、その後のコミュニケーション能力の基礎になる。自分が話を聞いてもらった経験がないと、人の話を聞けない。しかし、今の保護者は子どもの話を待てない。子どもの話を聞いて共感することが大切。共感があれば話す心地よさを味わうことになり、次のステップにつながる。

教師の話が面白くなければ子どもは聞かない。教師が楽しい話を子どもにたくさん聞かせることも必要である。聞く心地よさも味わわせていきたい。

目を見て話しを聞いて共感するのは大切。楽しい、子どもの心を惹きつけるような話を教師がしなければならぬ。体験の際に大人の待つ姿勢は大切だが、話を聞く際にも待つことが大切。言葉の先取り、子どもの代弁をしてしまっている。自分の体の説明ができない小中学生もいる。

「それは、違うよ。」「それは先生が間違っている。」などのように、保護者は子どもの話を否定的に聞いているのではないか。お年寄りが対象だが、傾聴ボランティアがある。言葉のやりとり、ドッジボールではなくキャッチボールが大切。目を見ながら話を聞くと、子どもはどんどん話すようになる。学童の中で、保護者に話している。しかし、保護者も人の話を聞けない場合がある。

【会長】

表現できなければ自信がもてない。

子どもだけでなく、保護者も演奏会でおしゃべりをして演奏を聴けない。授業をきちんと聞くか、どうかは担任の力量によるところが大きい。生徒の興味に訴える授業や話をしていくことが大切。コミュニケーションでは、人間関係を築く力が必要。留学をしても、人間関係を築くことができなければ十分な成果は得られない。コミュニケーションだけが独立しているのではなく、人間関係を築く力と密接な関係がある。

新たなコミュニケーションの問題として、インターネットなどを介したいじめの問題がある。コミュニケーションは、人と人をつなぎ、人と人を高めることになる反面、人を殺す道具にもなることもしっかりと教えていく必要があるのではないか。

【会長】

中学生や高校生は目を見て会話ができないと言われているが、このことについてはどうか。

相手に対する興味や想像力が欠如しているのではないか。人と話をすることは楽しいことである。しかし、話をしても何の興味もわかないということがあるのではない

か。あまりにも、情報が氾濫しすぎていて、インターネットを見ればほとんど全てのことが分かり、テレビをみると面白いことが多く流れてくる。人と話して楽しいと感じる経験がないことが、会話ができない原因ではないか。

コミュニケーションと聞くと多くの場合、「どれだけ言うか」と捉えてしまう。管理職の会議などでトップが「コミュニケーションが取れていない。」と言うと、それを聞いた管理職は「まだ言い足りないのか。」と誤解して、さらに部下にまくし立てる。部下に聞くと、「上司に一方的に言われて、何も言い返せない。」と言う。これが繰り返されてコミュニケーションが悪化する負のサイクルに陥ってしまう。私もコミュニケーションのポイントは「聞くこと」だと思っている。しかし、「言うこと」がコミュニケーションだと思っている人もいるので、敢えてコミュニケーションという言葉を使わず、「聞く力」などと表現するほうがよいのではないか。

一言でコミュニケーションといってもいろいろある。コミュニケーションを4つの箱に分けると、縦軸が公式と非公式、横軸が1対1と1対多。非公式の1対1は、上司が部下に「ちょっと、帰りに一杯やるか。」というもので、普段言えないことをやりとりする。これは双方向のコミュニケーション。公式の1対多数は、伝達事項を伝える朝礼など、一方向のコミュニケーション。非公式の1対多数は、歓送迎会などチームの一体感を醸成する。最後に公式の1対1のコミュニケーション、つまり、ちょっと一杯が入っていない正式な双方向のコミュニケーションが残るが、実はこれが全く行われていなかった。これに気付いて、上司と部下の公式な1対1のコミュニケーションの場づくりに取り組んだことがある。1対1なのに、初めはやっぱり上司が一方的に話してしまう。その様子をビデオに撮って上司に見せると、反省して部下の話を聞き始め、少しずつコミュニケーションがよくなる。やはり、聞く時間が多くないといけない。

【会長】

上司が一方的に話をするのは、授業にもそういった傾向があるのではないか。日本の教育文化で、知識注入型であり、双方向型ではない。そのために、子どもの話を聞くと言うこと、自分を表現させると言うことなどのフィンランドや欧米、韓国などのようなコミュニケーション重視の指導方法に関する研修が必要であり、実践モデル校による研究が必要である。すると、能動的な楽しい授業ができるのではないか。家庭や地域での啓発も必要。

今の子どもは表現力がなく、コミュニケーションがとれない。挙手して発表することがほとんどない。社会教育で行っているジュニアリーダー研修でもそうである。そのため、子ども会は単位制にしている。

【会長】

学校を支援する体制について

P T Aで行っている「新」家庭教育宣言」は、学校を支援するもの。家庭の教育

力を高め、元気で意欲ある子どもを学校に送り出すことが一番の支援であると考えている。これまで、行政の支援など、いろいろな取り組みがありながら、結果的には、今の課題の多い現状になってきていることを考えると、20～30年前にもう一度戻って考えることが必要になる。保護者も子どもも消費社会で育ち、サービスを受ける側になっている。「サービスを受けて当然である。」ということも学校にも求めている。自発的な体験をさせようと思っているが、なかなかできていない。とにかく、させる、食べさせる、寝させることをやろうと呼びかけている。そういうことを施策として実施したほうが早いのではないか。県民あげて「子どもを寝かせる」ことに取り組むことが必要。

あまりにも「子どもの自主性」ということを言いすぎてはいけないのではないか。夜更かしするのは自主性ではないことを強く言うべきではないか。生活が便利になっており、効率化を求めている。子どもには無駄、無理を体験させなければならない。また、音楽科、図画工作科、家庭科などを余裕をもって指導させることが大切なのではないか。

コミュニケーションについても、挨拶を交わす楽しさを味わわせることが第一歩である。

地域による学校への支援として、毎日、地域の大人がボランティアとして、国語・算数を指導している。現在の学年に関係なく、小学校1年生からの問題をさせている。その問題をクリアしないと次の学年の問題に取り組むことができない。その後は、遊んだり、レクリエーションをしたりしている。アンビシャスは遊びが中心だが、子どもの学びの基盤としての基礎・基本が十分でなければ、地域で指導する。

【会長】

学校で学ぶために、家庭でさせるべきことをきちんとさせることが必要。昭和55年調査で夜10時以降に就寝する子が2歳児で29.3%だったが、平成12年調査では、59.2%になっている。

小学校に対して民生委員の方に、学校支援ボランティアをお願いしている。民生委員は児童委員でもある。ボランティアを活用することで、学校は教育活動をよりよくすること、民生委員は児童委員としての自覚を深めていただくことを目的としている。最初は小学校の1～3年生に掃除の仕方を教えた。今の低学年の子どもは掃除ができない。教師も個別に指導することが難しい。地域のいろいろなことを知っておく必要のある民生委員が学校に関わることで、双方にメリットがある。大切なのは、教師とボランティアをつなぐコーディネーターである。学校支援ボランティアをしたくてもどうすればよいのかわからない人、学校もボランティアに来てほしいが単発的なゲストティーチャーしか知らない。それをつなぐためのコーディネーターが必要となる。そうすれば受け入れる側も体制を整えやすい。

中学校で「どんな支援が必要か。」と尋ねると、「予算がほしい。」と言われた。それは、これまで年1回実施していた長期宿泊体験を年2回実施すると、学年に落ち着きが出て、人間関係もよくなったからである。長期宿泊体験を学校で実施しようとす

る行政の金銭的な支援が必要である。

学校での切実な問題は、学校で何かやろうとすると地域からのクレームがすごく多いことである。新しいことをやろうとすればするほど、クレームが多くなる。地域からの支援はクレームがないことである。

家庭に関しては、今の保護者は、学校に対する関心よりも、自分の子どもに対する関心の方がとても強いことが問題としてある。「さんと比べて、どうしてうちの子がこんな不利益を被るのか。」といった考えである。学校に対するポジティブな関心よりも個人的な関心が強くなってきている。

また、経済的・家族的な状況が厳しい家庭が、以前と比較して多くなっており、家庭の教育力が低下しており、特に、幼・保・学校が頑張るしかないと考えている教師も多いのではないか。

地域には確かにクレーマーはいる。地域に学校とクレーマーとのパイプ役が必要なのではないか。学校と地域の方とのトラブルを、地域で処理できる民生委員やボランティア、自治会の役員などからの人的支援が必要。そうすれば、学校は子どもの指導に専念できるのではないか。

民生委員は何人くらいボランティアとして参加しているのか。

10人程度。一人年間多くて6回、少なくとも2回程度。同じクラスに継続して支援する。一緒に下校することでも十分な支援となる。授業の準備、後片付けもある。

地域の支援を受ける際に、学校として大切にしなければいけないことは、子どもと教師の関係を明確にして、教師が指導すべきことを支援ボランティアに任せないことである。実際に丸投げをしている状況もある。学校が支援を受けるに値する教育活動を実施しているかが大切。何でも支援を受けるだけではない。

学校に大人の居場所を作ることに取り組もうとしている。地域の方が学校に来やすい状況をつくり、学校で大人が活動している場を設けることで、子どもが休み時間に自然な形でふれあう機会を提供することができる。今までの一方的な支援の在り方と違う方法ができないか、考えている。

保護者は子どもと関わりたい、子どもと過ごす時間をつくりたい、地域の活動に家族で参加したいと思っている。しかし、サービス業に従事している保護者は多く、不規則な勤務、土日の仕事は特殊な仕事ではなくなってきている。したがって、家庭の支援を求めるときに、以前の専業主婦の生活スタイルをイメージしては、現実的な支援は得られない。男女共同参画も進んでおり、女性の管理職も多くなってきている。同時に、晩婚化も進んでいる。今、子育てをしているのは管理職である。それを踏まえた支援策を考えていく必要がある。

学校への支援は様々な方法がある。学校へ行って行う学校内支援だけでなく、通学

路で子どもの安全を見守る学校外支援もある。実態に応じたポイントがあるのではないか。

生徒が問題行動を起こした中学校の卒業生が、清掃活動を行ったという記事をみた。団塊の世代のボランティア、地域のボランティアだけでなく、母校の力になりたいという卒業生のボランティアもあるのではないか。それも、大人ではなく、学校を卒業したばかりの若いボランティアもあるのではないか。ここを組織して、同窓会などで学校に対する支援を呼びかけるようなことができれば、青少年の非行防止にもつながるのではないか。

【会長】

第1次提言に記載されているものでも、メディア関係からの支援などもある。次回でも関連する内容を出してほしい。率直な意見ありがとうございました。

<閉会・諸連絡>

次回以降の会議を事前の調査から、以下の期日を予定。

- 第2回会議 4月15日(火)
- 第3回会議 4月25日(金)
- 第4回会議 5月14日(水)
- 第5回会議 6月25日(水)